

# 「助ける」と「手伝う」の使い分けについて

山内 博之・鈴木 美恵子

## 1. 問題意識

山内・松尾(2022)においては、「救う」と「助ける」の使い分けのルールを明らかにした。「救う」と「助ける」は、「対象の状態をプラス方向に動かす」という共通する意味を持つが、「救う」は「対象が完全に無力な時」に使い、「助ける」は「対象が完全に無力ではない時」に使う、というのが、その使い分けのルールである。

この使い分けのルールを見て気になることは、「手伝う」にも「助ける」と似た意味があるということである。「手伝う」の意味も、「対象が完全に無力ではない時」に「対象の状態をプラス方向に動かす」ことであると言える。それなら、「助ける」と「手伝う」には、どのような違いがあるのだろうか。そこで、この論文では、「助ける」と「手伝う」の使い分けのルールを明らかにする。

「助ける」と「手伝う」は、実際よく似ている。以下は、「助ける」と「手伝う」の両方が使用可能な文である。なお、実例であるという断りがない限り、この論文で使用する例文はすべて作例であり、文法性判断は山内と鈴木で行った。

- (1) 論文の締め切り間近で大変だった時、佐々木さんが私を（○助けて／○手伝って）くれた。
- (2) パソコンが動かなくなって困っていたら、パソコンに詳しい友達が（○助けて／○手伝って）くれた。
- (3) このNPOは、高齢者の生活を（○助ける／○手伝う）取り組みを行っている。

これらの文においては、「助ける」と「手伝う」の両方が使用可能であり、どちらを使っても、文意は大きくは変わらないように感じられる。しかし、以下の文においては、いずれか一方の使用が許容されていない。

- (4) 兄は、川に落ちた子供を（○助けて／×手伝って）、表彰されました。
- (5) 図やグラフは、難解な文章の意味の理解を（○助ける／×手伝う）。
- (6) 運ぶ荷物がたくさんありますね。私も少し（×助け／○手伝い）ます。
- (7) 私は伊藤さんの卒業論文のための調査を（×助けた／○手伝った）。

上記の(4)(5)においては「手伝う」の使用が許容されず、(6)(7)においては「助ける」の使用が許容されていない。どのようなルールに基づいて、「助ける」と「手伝う」の使用の可否が決定されているのか、この論文においては、そのルールを明らかにする。

なお、この論文における、山内と鈴木の作業の分担についてであるが、まず、鈴木が文法性判断による分析を行い、両者の使い分けのルールを概ね明らかにした。その後、山内がコーパスを使用した分析を行い、鈴木が明らかにした使い分けのルールの妥当性を検証しつつ、必要に応じてルールの修正を行っていった。そして、それらの結果を鈴木と協議しつつ、山内が論文の形にまとめた。

## 2. 先行研究

「助ける」と「手伝う」の使い分けに関する主要な先行研究には、山内・松尾(2022)と森田(1989)がある。「1. 問題意識」でも述べたが、山内・松尾(2022)では、「救う」と「助ける」の使い分けのルールが考察されている。山内・松尾(2022)によって導き出された「救う」と「助ける」の使い分けのルールは、以下のとおりである。

- (8) 共起制限：「助ける」はカラ格とは共起しにくい。  
共通する意味：対象の状態をプラス方向に動かす。  
「救う」：対象が完全に無力な時に使う。  
「助ける」：対象が完全に無力ではない時に使う。

(8) で問題になるのは、「手伝う」も、「助ける」と同様、「対象の状態をプ

ラス方向に動かす」という意味を持ち、かつ、「対象が無力でない時」に用いられるのではないかと考えられる点である。

また、「助ける」はカラ格とは共起しにくいのであるが、まったく共起しないわけではない。では、「手伝う」とカラ格の関係はどのようになっているのであろうか。直感的には、「手伝う」はカラ格とは共起しないように感じられるが、この点もコーパスを使って確かめてみたい。

次に、森田（1989）における、「助ける」「手伝う」の記述について述べる。まず、「手伝う」については、次の（9）のように説明されている。

- (9) 「手伝う」はある場合「助ける」と共通した意味で用いられる。しかも、右の例にも見られるように、仕事や作業ばかりでなく、日常の生活行動にも使える。「お手伝い」の語も造る。「お手伝いする」「お手伝いさん」という語からもわかるように、「BがAノCヲ手伝う」というとき、行為の主体性はあくまでA側にあり、A自身のみでも遂行できるところをBが援護する補助的役割にすぎない。

なお、上記の（9）で言及されている「右の例」とは、以下の例である。

- (10) 父の事業を助ける／父の事業を手伝う

- (11) 食べきれないから少し助けてくれないか／少し手伝ってくれないか

山内・松尾（2022）の結論である（8）で示されているように、「助ける」と「手伝う」は、ともに「対象が完全に無力ではない時」に用いられるのかもしれないが、森田（1989）によれば、「BがAノCヲ手伝う」において、「行為の主体性はあくまでA側にあり、A自身のみでも遂行できるところをBが援護する補助的役割にすぎない」とのことである。この意味・用法の記述は、大いに参考になる。次章以降で検討してみたいと思う。

しかし、森田（1989）には、疑問に思える記述もある。次の（12）（13）を見ていただきたい。いずれも森田（1989）からの引用である。先ほどの（9）に続く形での記述であり、ABCというアルファベットは、「BがAノCヲ手伝う」という構文を前提としたものである。

- (12) 「手伝う」という以上、「Cヲ手伝う」であって（「Aヲ手伝う」とは言わない）、何かの仕事や事態Cを処理するという状況での行為の一部分担を

意味する。

- (13) 一方「助ける」は「BがA（ノC）ヲ助ける」のように、直接Aを受けて「父を助ける」「課長を助けて調査を進める」のようにも使える。（「父を手伝う」とは言えない）A自身のみでは事の遂行に不安があるから、一部をAに肩代わりして事を引き受けるのである。「助ける」という以上、助けなければその状況は危ない、Aのみでは立ち行かないという含みがある。

疑問に思えるのは、「『Aヲ手伝う』とは言わない」「『父を手伝う』とは言えない」という部分である。(1)の例文のように、「Aヲ手伝う」と言うことができるのではないかと思われる。この点についても、次章以降で検討したい。

### 3. カラ格との共起

「2. 先行研究」において、いくつかの研究課題が浮かび上がったが、ここでは、「手伝う」とカラ格の関係についてコーパスを用いて検討を行う。

使用したコーパスは「現代日本語書き言葉均衡コーパス (BCCWJ)」で、使用したツールは「中納言」である。「手伝う」とカラ格との共起を見るために、以下の作業を行った。

- (14) ①語彙素「手伝う」を検索し、出現数を記録する。  
②語彙素「から」を前方共起「キーから1語」に指定して語彙素「手伝う」を検索し、出現数を記録する。  
③目視によって、②で得られた全用例から必須格「から」を抜き出し、数を数える。

なお、山内・松尾（2022）では、「救う」と「助ける」について（14）と同様の作業を行い、その結果を表に示している。今回は、新たに「手伝う」について（14）の作業を行い、その結果を、山内・松尾（2022）で示された「救う」「助ける」の結果とともに示す。次の表1が、「救う」「助ける」「手伝う」とカラ格との関係を示したものである。

表 1 カラとの共起

	出現数	カラとの共起数	必須格カラとの共起数
救う	3,061	192	175
助ける	4,539	37	15
手伝う	1,988	12	0

表1を見ると、まず、「助ける」と「手伝う」は、カラとの共起数が「救う」よりも圧倒的に少ないことがわかる。次に、「助ける」と「手伝う」を比べると、「手伝う」の方がカラとの共起数が少なく、数としては、「助ける」の半分以下であるが、「手伝う」は、出現数も「助ける」の半分以下しかないので、そのため、相対的に見て、カラとの共起数が「助ける」と「手伝う」のどちらが多いかはよくわからない。しかし、必須格カラとの共起数は、「手伝う」はゼロなので、「助ける」とは異なり、「手伝う」は必須格カラとはまったく共起していないことがわかる。

ちなみに、カラとの共起が見られた「手伝う」の用例は、以下の12例である。なお、用例は、検索されたそのままの形ではなく、前後を適宜省略してできるだけ読みやすい形にした。また、カラには下線を引いた。

- (15) お願いだから手伝ってくれないか
- (16) それなら、ご飯作るから手伝って
- (17) 給料などいらないから手伝わせてくれ
- (18) 私の友だちが頑張っているから手伝ってあげて。
- (19) お互いが仕事をしているから手伝うとって家事もしてくれる最高の旦那さんです。
- (20) サイナージオは具合が良い日は朝から手伝ったが
- (21) シバタさんには、これから手伝ってもらいたいことが一つあるので
- (22) 隣の部署の庶務もこれから手伝ってくれないか？
- (23) 当教室のパーティでは、準備から手伝ってもらい
- (24) 私は横から手伝いながら、そんな祖母の姿をいつも興味津々で見っていたのです。
- (25) われわれもこれまでの経験や仕組みの活用といった側面から手伝う役割はあると思う。
- (26) そのくせ自分から手伝おうとは言わない。

(15) ~ (19) のカラは、接続助詞のカラなので、「手伝う」の必須格ではない。(20) ~ (26) のカラは、格助詞ではあるが、(広義の) 時もしくは場所を起点として示すものであり、「手伝う」の必須格であるとは考えにくい。

山内・松尾 (2022) によれば、「助ける」がとるカラ格名詞は、「窮地、危機、罪、貧困、飢え」など、森田 (1989) の言う「マイナス評価の領域」を意味するものであるとのことである。「手伝う」がカラを必須格としてとらないということは、「手伝う」の辞書的意味が「マイナス評価の領域」とは無関係か、あるいは、非常に関係が薄いということなのではないかと思われる。

#### 4. ヲ格名詞に関する分析

次に、「手伝う」がとるヲ格名詞についての分析を行う。「2. 先行研究」で見たように、森田 (1989) では、「BガAノCヲ手伝う」という構文を考えた場合、「Cヲ手伝う」と言うのであって「Aヲ手伝う」とは言わない、と述べられている。これが確かなことなのか、コーパスを用いて検証してみたい。

前章と同じく、使用したコーパスは「現代日本語書き言葉均衡コーパス (BCCWJ)」で、使用したツールは「中納言」である。「手伝う」がとるヲ格名詞を収集するために、以下の作業を行った。

- (27) 語彙素「を」を前方共起「キーから1語」に指定して語彙素「手伝う」を検索する。

(27) の結果、検索されたのは 778 例であった。つまり、「手伝う」のヲ格名詞が 778 例収集できたということである。これら 778 例を目視で確認したところ、48 例が「Aヲ手伝う」という形になっていることがわかった。

その 48 例における「A」は、具体的には、「救急隊員」「用務員」などの職名、「母親」「父さん」などの親族名称、「島谷」「藤吉郎たち」「マリー」などの固有名詞、「我ら」「お前」などの人称代名詞等であった。実際の例を以下に示す。なお、当該の名詞句には下線を引いた。

- (28) 倒れている三木美紀の手当てをする救急隊員を手伝っていた。  
 (29) ベネチアはそれをきっちりまとめると、用務員を手伝って患者をストレッチャーに移し、  
 (30) 学生生活の週末には楽しいことも沢山あるだろうに、彼は熱心に母親を

手伝っていた。

- (31) せがれは父さんを手伝って、きびきびと陽気に働いた。
- (32) 僕は島谷を手伝った。
- (33) 川役人、小六、可成も袴を脱ぎ、水にはいって、藤吉郎たちを手伝う。
- (34) 要するに俺がマリーを手伝えば文句はないんだろ
- (35) では、この男に我らを手伝わせるか
- (36) だが、お前を手伝うことはできぬぞ。

(27) の方法で検索された用例が 778 例であり、「Aヲ手伝う」という形になっているのは、そのうちの 48 例であるので、数としてはそう多いわけではない。しかし、(28) ～ (36) を見ていただければわかるように、「Aヲ手伝う」という形の用例は、間違いなく存在する。

778 例から 48 例を除くと、残りは 730 例であるが、では、この 730 例すべてが「Cヲ手伝う」という形になっているのかというと、そうではない。「店を手伝う」という例があるのだが、「店」は「C」だとは考えにくい。森田 (1989) の言う「BガAノCヲ手伝う」は、「(主体)ガ(対象)ノ(行為)ヲ手伝う」というように読める。しかし、「店」は「行為」であるとは言えないだろう。

「店」は 18 例あり、「お店」も含めれば 20 例になる。また、「店」に類する名詞句には、「薬屋」「造船所」「サーフショップ」「ペンション」「実家の精米店」「守井洋品店」「明治夢庵」などがあるが、このようなものも合わせると、「店」に類する名詞句は 53 例になった。以下に、実際の例を示す。

- (37) 中村さんも店を手伝って、お酒の配達をした。
- (38) 私がお店を手伝うようになってすぐのころですけど
- (39) 和那が父親と和解し、専務の肩書で薬屋を手伝い始めたのだ。
- (40) 二人は造船所を手伝わなくて良いのかと心配してくれたが
- (41) 途方にくれた三人は、サーフショップを手伝い、変なおじさん・デュークにサーフィンの指導を受けることになる。
- (42) 娘夫婦は夏場、軽井沢にきて、ペンションを手伝う。
- (43) 実家の精米店を手伝っているアキラも、話を聞きつければそのうち戻ってくるに違いない。
- (44) 奥さんの方は、頼まれたときだけ、守井洋品店を手伝っていたということです。
- (45) 平日は明治夢庵を手伝いながら、有田の観光と有田焼きを勉強する毎日

です。

(27) の方法で検索された 778 の用例から、「A」だと考えられる名詞句を持つ 48 例と、「店」に類する名詞句を持つ 53 例を除くと、残りは 677 例になる。これら 677 例の用例においては、そのヲ格名詞は、概ね「BガAノCヲ手伝う」の「C」に当たるものであった。たとえば、「仕事」「家事」「着替え」「片付け」などである。実際の例を以下に示す。

- (46) 清一さんは高校を出てすぐ、親父さんの仕事を手伝うようになった。  
 (47) でも、夫が家事を手伝ってくれたり、気を使ってくれるので心強いです。  
 (48) 夫婦の部屋で、珠世は夫の着替えを手伝っていた。  
 (49) 屋根瓦の片付けを手伝ったり、足の踏み場もない状態の部屋の中の片付けを手伝ったりしています。

また、「C」に当たる名詞句の中には、「荷物をトランクに入れるの」「荷物を運ぶの」のような、動詞句を「の」によって名詞句化したものもあった。実際の例を、以下に示す。

- (50) 荷物をトランクに入れるのを手伝ってください。  
 (51) おばさんも、学校の責任者は馬鹿だとぶつぶつ言いながら荷物を運ぶのを手伝っていた。

このような例は、677 例の中に 118 例あったので、「手伝う」がとるヲ格名詞句の中では、典型的なタイプの 1 つであると言えるのかもしれない。

森田 (1989) では、「手伝う」がとるヲ格名詞句は、「BガAノCヲ手伝う」の「C」のみであると述べられているのであるが、しかし、「A」がヲ格名詞句となっている用例は確かに存在するし、「C」であるとも「A」であるとも言にくい、「店」のようなヲ格名詞句も少なからずある。とはいえ、「手伝う」がとるヲ格名詞句は、森田 (1989) が指摘しているように、やはり「C」が中心なのであろう。そして、たとえば、「父さん」であれば、それが「父さんの仕事」というように解釈可能であるから、「C」でなくても許容されているのであろう。また、「店」などについても「店の仕事」というように読むことが可能であるから、同様に、「C」でなくても許容されているのであろう。「C」でない名詞句の存在については、「語用論的な効果」ということで、説明が可



能なのではないかと思われる。

## 5. 「助ける」と「手伝う」の使い分けのルール

ここまで、「3. カラ格との共起」では「手伝う」とカラ格との共起について検討し、「4. ヲ格名詞に関する分析」では「手伝う」がとるヲ格名詞について検討してきた。この章では、「助ける」と「手伝う」の意味の違いについて考察する。まず、両者の意味の違いに関する森田（1989）の記述を、以下に再掲する。

- (9) 「手伝う」はある場合「助ける」と共通した意味で用いられる。しかも、右の例にも見られるように、仕事や作業ばかりでなく、日常の生活行動にも使える。「お手伝い」の語も造る。「お手伝いする」「お手伝いさん」という語からもわかるように、「BがAノCヲ手伝う」というとき、行為の主体性はあくまでA側にあり、A自身のみでも遂行できるところをBが援護する補助的役割にすぎない。

一方、山内・松尾（2022）においては、「救う」と「助ける」の使い分けのルールとして、以下の（8）が示されていた。

- (8) 共起制限：「助ける」はカラ格とは共起しにくい。  
 共通する意味：対象の状態をプラス方向に動かす。  
 「救う」：対象が完全に無力な時に使う。  
 「助ける」：対象が完全に無力ではない時に使う。

そこで、(8)に(9)の考え方を採り入れ、「救う」「助ける」「手伝う」の使い分けのルールとして、次の(52)を提案したい。

- (52) 共通する意味：対象の状態をプラス方向に動かす。  
 「救う」：対象が完全に無力な時に使う。  
 「助ける」：①対象が完全に無力ではない時に使う。  
           ②主体が対象とは異なる行為を行う時に使う。  
 「手伝う」：①対象が完全に無力ではない時に使う。  
           ②主体が対象の行為をともに行う時に使う。

「対象の状態をプラス方向に動かす」ということと、「対象が完全に無力ではない時に使う」ということは、「助ける」と「手伝う」で共通している。そして、「主体が対象の行為とは異なる行為を行う」のか「主体が対象の行為をともに行う」のかということが、両者の違いである。

このルールを使用すれば、「救う」と「助ける」の使い分けは概ね説明が可能となる。次の例文を見ていただきたい。次の(4)(53)～(55)は、いずれも「助ける」が許容されて「手伝う」が許容されていない例である。

- (4) 兄は、川に落ちた子供を（○助けて／×手伝って）、表彰されました。
- (53) 消防隊員が、火災現場から犬を（○助けた／×手伝った）。
- (54) 心臓の手術で有名な高橋先生は、これまでにたくさんの人の命を（○助けて／×手伝って）きました。
- (55) 大学生の娘は、アルバイトをして家計を（○助けて／×手伝って）くれています。

まず、(4) についてであるが、「川に落ちた子供」は、おそらく助かろうとして手足をバタバタさせてあがいているであろう。そこに飛び込んだ「兄」は、「子供」と一緒に手足をバタバタさせてあがいたわけではなく、浮き輪につかまらせたり、「子供」を背負って泳いだりという行為、つまり、「子供」とは異なる行為によって「子供」の状態をプラス方向に動かしたと考えられる。そのため、「手伝う」が許容されず、「助ける」が許容されている。(53) については、「火災現場」で「犬」は、キャンキャン鳴いて走り回るなど、その場から逃げ出そうと、「犬」なりの努力をしていたであろう。「消防隊員」は、防火服を着て火災現場に入り、犬を抱えて運び出すなど、「犬」が自ら行った努力とは異なる方法で「犬」の状態をプラス方向に動かしている。(54) については、「高橋先生」が、「手術」をするという、患者自身の努力とは異なる方法によって、患者の状態をプラス方向に動かしている。(55) については、「大学生の娘」が、親とは異なる方法、つまり、アルバイトという副業によって「家計」の状態をプラス方向に動かしていると考えられる。

次の例文を見ていただきたい。上記の(4)(53)～(55)は、ガ格名詞（主体）が有情物であったが、次の(5)(56)(57)はガ格名詞（主体）が非情物である。

- (5) 図やグラフは、難解な文章の意味の理解を（○助ける／×手伝う）。

- (56) このお茶に含まれている成分は、食べ物の消化を（○助ける／×手伝う）  
そうです。
- (57) この土には、植物の成長を（○助ける／×手伝う）栄養分が豊富に含ま  
れています。

(5) (56) (57) のガ格名詞（主体）は、それぞれ「図やグラフ」「このお茶  
に含まれている成分」「栄養分」である。これらが、それぞれのヲ格名詞であ  
る「難解な文章の意味の理解」「食べ物の消化」「植物の成長」という行為をと  
もに行っているとは考えにくい。そのため、「手伝う」が許容されず、「助ける」  
のみが許容されているのであろう。

次の (6) (7) (58) ~ (61) は、「助ける」が許容されず、「手伝う」が許容  
されている例である。

- (6) 運ぶ荷物がたくさんありますね。私も少し（×助け／○手伝い）ます。
- (7) 私は伊藤さんの卒業論文のための調査を（×助けた／○手伝った）。
- (58) 実家の店は、年末は忙しくて両親だけでは大変なので、私も毎年（×助  
けに／○手伝いに）行きます。
- (59) 仕事が多くて困っていた時、吉村さんがコピーを（×助けて／○手伝って）  
くれました。
- (60) 妹は、野菜を切ったり皿を並べたりして、食事の準備を（×助け／○手  
伝い）ました。
- (61) 引っ越しの時、友達に荷物をまとめるのを（×助けて／○手伝って）も  
らいました。

(6) では、ガ格名詞（主体）である「私」が、「運ぶ」という行為を対象と  
なる人物とともにに行っている。そのため、「助ける」が許容されず、「手伝う」  
が許容されている。(7) では、ガ格名詞（主体）である「私」が「伊藤さんの  
卒業論文のための調査」を「伊藤さん」とともにに行っている。(58) ~ (61)  
では、それぞれガ格名詞（主体）である「私」「吉村さん」「妹」「友達」が、  
「実家の店（の仕事）」「コピー」「食事の準備」「荷物をまとめるの」という行  
為をそれぞれの対象となる人物とともにに行っている。

そして、この論文の冒頭で示した (1) ~ (3) において、「助ける」「手伝う」  
の両者が許容される理由も、(52)によって説明できるものと思われる。以下に、  
(1) ~ (3) を再掲する。

(34)

- (1) 論文の締め切り間近で大変だった時、佐々木さんが私を（○助けて／○手伝って）くれた。
- (2) パソコンが動かなくなって困っていたら、パソコンに詳しい友達が（○助けて／○手伝って）くれた。
- (3) このNPOは、高齢者の生活を（○助ける／○手伝う）取り組みを行っている。

(1) は、「佐々木さん」が「私」と異なる行為をして「私」の状態をプラス方向に動かしたとも考えられるし、「私」がしていた行為をともに行って「私」の状態をプラス方向に動かしたとも考えられる。(2) では、「パソコンに詳しい友達」が、パソコンの修理法を教えるなど、対象とは異なる行為によって対象の状態をプラス方向に動かしたとも考えられるし、パソコンの修理を対象ともに行って対象の状態をプラス方向に動かしたとも考えられる。(3) では、「(このNPOの) 取り組み」が、資金援助など、対象とは異なる行為によって、「高齢者の生活」の状態をプラス方向に動かしたとも考えられるし、料理やレクリエーションなどを対象ともに行うことによって「高齢者の生活」の状態をプラス方向に動かしたとも考えられる。このような理由により、(1) ～ (3) においては、「助ける」「手伝う」の両者が許容されているものと考えられる。

なお、「手伝う」には、慣用的な用法があることも、最後に述べておく。「手伝う」には、「XにYも手伝ってZ」「X。その上、Yも手伝ってZ」等の形をとり、「元々の要因Xに新たな要因Yが加わり、Zということが起きる」という意味を表すことがある。次の例文を見ていただきたい。

- (62) 数年前から続いている不況に、最近の円高も（×助けて／○手伝って）、父の会社は経営が苦しいそうです。
- (63) この道は、以前から車通りの多い道であった。その上、近くに大型のショッピングセンターができたことも（×助けて／○手伝って）、渋滞が深刻化している。

(62) は、「数年前から続いている不況」に「最近の円高」という新たな要因が加わり、「父の会社は経営が苦しい」ということが起きたという意味の文である。(63) は、「以前から車通りの多い道であった」ことに「近くに大型のショッピングセンターができた」という新たな要因が加わり、「渋滞が深刻化している」ということが起きたという意味の文である。

## 6. まとめ

山内・松尾（2022）では、「救う」と「助ける」の使い分けのルールを明らかにしたが、それに「手伝う」を加え、三者の使い分けのルールを示したものが、前章で示した（52）である。（52）を、以下に再掲する。

（52）共通する意味：対象の状態をプラス方向に動かす。

「救う」：対象が完全に無力な時に使う。

「助ける」：①対象が完全に無力ではない時に使う。

②主体が対象とは異なる行為を行う時に使う。

「手伝う」：①対象が完全に無力ではない時に使う。

②主体が対象の行為をともに行う時に使う。

「対象の状態をプラス方向に動かす」を共通の意味であるとし、三者の意味を以下のように記述することも可能である。

（64）救う：対象は無力であり、主体の行為のみによって、対象の状態をプラス方向に動かす。

助ける：対象の行為には効果がなく、主体が対象とは異なる行為を行うことによって、対象の状態をプラス方向に動かす。

手伝う：対象の行為には効果があり、主体がその行為をともに行うことによって、対象の状態をプラス方向に動かす。

また、次の文を見ていただきたい。（65）の a. は「救う」、b. は「助ける」、c. は「手伝う」の例文である。そして、d. は使役文である。

（65）a. 医師が意識不明の患者を救った。

b. 医師が病と闘う患者を助けた。

c. 医師が患者のリハビリを手伝った。

d. 医師が患者にリハビリをさせた。

a. から c. へと進むにつれて、対象の無力さのレベルが下がっていき、d. では完全に無力ではなくなり、「医師」の「救う・助ける・手伝う」という行為が必要でなくなる。そして、「医師」が命じさえすれば「患者」の状態はプラ

(36)

ス方向へと動いていくことになる。このように見ると、「救う・助ける・手伝う」が使役へとつながっているように感じられるのだが、いかがであろうか。

### 参考文献

森田良行（1989）『基礎日本語辞典』角川学芸出版

山内博之・松尾夏海（2022）「『救う』と『助ける』の使い分けについて」『実践国文学』  
102号

（やまうち ひろゆき・実践女子大学教授  
すずき みえこ・実践女子大学非常勤講師）